

〈翻刻〉『明法房物語』——写本で流布した勸化本——

和田 恭 幸

一、はじめに

近世期に成立した勸化本には、各々の成立時期、すなわち近世前期・中期・後期の三期のそれぞれに、時代の特徴ともいうべきものを見いだすことができる。その特色は、内容や表現に止まるのではなく、書誌や、それにもなう流布のあり方にまで及ぶものである。

近世後期に勸化本が写本の形で流布したことは、すでに後小路薫氏著『近世勸化本の研究』（二〇一〇年発行）に指摘される事柄である。しかし、後小路氏ご逝去の後、当該の研究領域において、写本の勸化本とは具体的にどのようなものであるのか、あるいは近世の唱導、一般的な文芸、

はたまた書物文化全般とどのような関わりを有するものであるのか等々、一切の研究は行われていない。

今般、翻刻紹介する『明法房物語』は写本で流布した勸化本の一つである。その伝本は、国文学研究資料館のウェブサイトに公開される「古典籍総合目録データベース」に、二本の所在が記されている（弘前市立図書館所蔵本、龍谷大学大宮図書館所蔵本）。この他に、兵庫県某家所蔵本（二本）、架蔵本（二本）がある。兵庫県の某家は、但馬福成寺の門徒で、同書を伝連如上人筆の名号とともに、代々大切に守り伝えてきた。楠淳證師（龍谷大学教授）のご学恩により、原本調査の機会を得た。ここに、所蔵者と楠師のご厚恩に深く感謝申し上げる次第である。なお、架蔵の二本は、近年筆者が古書店で買い求めたものに過ぎない。

さて、本作品の内容は、『御伝鈔』下巻三段「弁円濟度」の後日談に相当するものである。この説話は、「山も山」云々の歌とともに、長く節談説教で語られたものの一つでもある。例えば、長い因縁談を用いない東保流のような流派においても、『十方諸有讃説教』第三席に「至徳」を釈して「転悪成善」と示し、その因縁談としてこの説話を採っている。

各々の伝本の本文は、冒頭の文章、ストーリー展開は同一であるものの、他の箇所には相当量の相異点を見いだすことができる。その本文異同について考察することは、写本の勸化本の本文形成を考えるための一助となろう。もちろん、本作品の表現には、節談説教との類似点が認められ、その成立の始原が説教僧の語りであることを示すもののようにある。しかし、基本的な仏教語、あるいは主要な人名の表記は、多くの場合、お粗末な当て字である。このことは、在家の間で伝写されたことを明瞭ならしめるものである。ただし、成立の始原のみならず書写の過程においても、耳から聞いたものが加えられたり、あるいはそれが表記に反映したと思しき部分も少なからず存在する。例えば、諸本の中に、弁円を「弁念」と連声の形で当て字をする一本

がある。これは、説教僧の語りや、法座参りの同行衆の話しぶりが表記に反映したものとも考えられるのではなからうか。また、そのような事共が諸本間の本文の増減に大いに関わるものであるとも考えられる。

如上の事柄を考察するため、架蔵の一本を翻刻紹介し、後日考究の用意をしたい。

二、底本の書誌

『明法房物語』（和田本（A本） 写本 半紙本一冊

和田恭幸蔵

装訂 四針袋装。中本一冊。寸法、二〇・〇×一五・〇cm。

紙数、全一六丁（遊紙、前方二丁・後方二丁／本文一四丁）。

表紙 素紙厚表紙。外題「明法御房物語」（原・直書・表紙左肩）。

内題 「関東板敷山明法坊御物語」。

本文 每半葉八行。漢字平仮名、ごく一部分のみ片仮名。振仮名は片仮名（本文同筆）。

奥書 「弘化三丙午歳四月下旬／写之／江三押 利太郎」。

備考 書名下に「A本」とするのは、架蔵本が二本あるためである。書名は諸本間で著しく異なるため、岩波

「国書」登載書名に拠った。外題については、「うちつけ書き」の呼称に疑義が唱えられて久しいのでこれを用いない。

三、翻刻

〈凡例〉

- 一、漢字はすべて現代の通行字体に統一した。
- 二、句読点を恣意的に付した。
- 三、振仮名は底本に記されるもののみ記した。
- 四、丁変わりのみを記し、行変わりについては記さなかった。

〈翻刻〉

関東板敷山明法坊御物語

或時、明法坊 祖師聖人の御前へ罷出て、何事の御物語り申され候事、我山伏たりし時、祖師聖人は関東御化導の折からは、御勸化の有難さに、自他老若の別なく、風に草

〈翻刻〉『明法房物語』

葉のなびくがごとく、他力易行の道広く、夫故に私か法力、いのり祈禱の道「(一オ) 究、此山伏も其時は、関東一の山伏で、現世安穩、延命長久の祈り、災難も、不動の沙汰の利劍にて、他方世界へ追払へ、今生に而は病ふ疫難、劍の難、只今祈念し奉る所は、武運長久、息災延命と、云う言葉の花に、銭金の置所なき仕合も、祖師聖人に隔られ、法共力共、祈れ共、更に頼む人もなし。」(一ウ) あらう憎や残念や、いかせん、惡念の劍を抜て一打に、あの聖人を害そふなら、又々元の弁縁に、靡人の心ぞど、板敷山の麓なる、岩がにくつの其影に、ねだぞ合て待ければ、祖師聖人は峯の道、称名の声高く、師弟三人諸共に、泪と供に御帰りあり。私、是を見るよりも、明なば嶺の道、「(二オ) 鬼が高根と云坂に、今やくと待ちければ、聖人其日は麓の道、衣の袖を颯と、正信坊、蓮位坊諸共に、南無の御声は哀げに、泪と共に御帰り有ければ、弥々惡心盛にして、荒妬しや残念やと、心の劍を剛立て、御庵室に歩行、只一刀と思へ込、参りし所にふしきやな、御尊顔を見るよりも、身の毛も弥立」(二ウ) て醜敷、互に物を云ぬのに、熱泪の溢は、仏智不思議の顯れて、御恥敷やと申上、衣の袖を絞らる。聖人、是を聞召、荒有難や明法坊、

左程に猛き山伏が、どうして其氣に成たぞや。此親鸞を打殺し、跡で自力の法力にて、雜行雜修の錢金を、取ふと思ふた心をは、誰が止よと異見した。此親（三才）鸞を殺など、誰が云たぞ明法坊。他力不思議は愛ならめ。荒有難や忝なや、斯有難きさんげ社、仏智不思議の顛れしぞや。身の置所もなきそ迎、声も惜します泣給ふ。暫御泪を拭わせられ、又々喜ばす事か有。我を殺て、物取て、兜巾、鈴かけ、螺の貝、赤き衣で光らかし、法印様と云るゝ身か、布（三ウ）の衣に黒けさ懸、鷹僧の山伏か、坊主頭に剃こぼし、我等か弟子に成たへと、誰か教へて、誰為て、何から其氣に成たそや。敵に思ふて呉るゝ心迄、信は願より起ると知れ。人に勝て悪人の、親鸞や明法坊、智者上人て有ならば、彼程如来の御苦勞被成ぬ害の事なれと、鬼の容成山伏か、明法坊（四才）と成たるも、大慈大悲の御一念。明法坊が仕合そやと、語り給ひは明法坊、悪人正氣の御願とは、いかなる如来の御慈悲ぞや。泣ても足らぬ有難さよと、大声上て泣れける。思へば〱世の中の、我心の醜敷。斯有難き御慈悲をは、今迄知らて惡の身に、人を迷す程の徒者を、御助成されん其ために、難作惱作（四ウ）の御苦勞被成、夫たも信する心も出ず、明なば其日の

暮る迄、渡世の業に身をまとい、作る惡事は必定無間等活の、劍の山と積重、浄土を倅かる山伏を、惡ひ奴とは思召さへて、苛可愛と思召すは、如何成如来の御心ぞや。此山伏を夫ほど不便かわゆふ思召し、何の御徳に成事ぞ、恭人知れは不孝人、忘るゝ（五才）と云も此事よと、六道四生の其間、請ぬ形もあらは社、今は常陸の山伏と生れ出たる幸に、如来大悲の追責させ、しん、しんきやう、よくしやう我國、乃至十念、若不生者不取正覺と、金剛他力の御足にて、十方衆生一人も、余さし漏さじと、大手広て追詰させ、勝れて深き惡業の、此山伏か胸中に、飛入り給ひた（五ウ）れはこそ、仏共法共如来共、知らぬそ惡氣の山伏か、仏智他力に追立られ、参る所は極楽の、如来の御側へ行ふとは、何から此氣に成たぞや。誰が宿善の手を取て、是は斯仕様と云事を教へたる覚へもなし、御庵室に尋行、祖師聖人を一打に、打殺そふと思ふた時、聖人様の御姿を、一目見るよりはら〱と、泪溢た（六才）其時より、地獄といへは目を塞、浄土といへは一時も、早く行たへ拜たへ、心に被成下たは、久遠実定阿弥陀仏、五濁の我等を見て、祖師聖人とならせられ、遙都の御位を、御捨なされて愚成、禿者と成給ふ、国々広き其中に、分て常

陸は辺鄙成、人の心の恐敷。情を知らぬ鹿猿、木こり、山かつ、炭薪き、釜の「(六ウ) 煙は信濃成、浅間山なれや。是を勧めん其為に、廿余年は其間、我物喰ふて人の氣を、兼させながら御苦勞に、鬼の様成る我々を、勧めながらに御宅はつ。正信坊は鉢の粉を、持ても輕麦粟を、四合に足らて御歸り有。其時、明法坊、御庵室に残り居、御留主居役の事なれば、薪を折て水汲て、哀淋敷鍋一ツ、麦を炊たり汁「(七オ) を煮、御洗足の湯をわかしたり。埴生の小屋に待間久く御歸を、つくくと思ふ様、山伏たりし時は、祖師聖人を害そふと思ふた心が、今は又、間もなく御歸り有かしと、早御顔を見ぬ内は、如何渡らせ給ふぞや、御宅鉢の家毎に、嚙々御勸化被遊御疲も有筈よ。車軸を流す雨の日も、御休もなへは、何たる如来の御「(七ウ) 慈悲ぞや。御目に懸らぬ其内は、胸塞て氣の毒で、彼尊の方の空斗り、見て居る心の遣せなく、独り口説を繰返し、是に付ても羨敷や、蓮位坊や正信坊、同じ御弟子と云ながら、いか成果報の人々や、聖人様の跡や先に付添て、御姿を見たり拝みたり、御詞を懸て貰たり、御挨拶を申た「(八オ) り、此世で社は聖人なれ、浄土へ行は弥陀如来、直にの如来の御詞を預りながら、御供して、正信坊や蓮位坊、責て

明法坊に御供させて下さらは、生々世々の御慈悲そやと、独語りを繰返し、思ひはく世の中の、まゝならぬ有様は、祖師聖人は誰有ふ、都にあらせ給ふなら、御樂に錦の床に有せられ、「(八ウ) 御上り物は七五三、百味の味に百人の、役人供人輿車、大僧正の御位に、成せらるゝ御人様が、衆生地獄に落るを見、あら苛や哀やと、如来の祖師とならせられ、地獄の容成常陸の国、鬼の容成人心、此山伏を始として、サアサ行ぬか參らぬかと、今日は三人、明日は五人、無宿善の花開き、了解の花の都迄、「(九オ) 送り届ぬ其内は、苦勞を苦共思はぬぞと、御身も疲れやせこかれ、果させ給ふこそ、とふやら御上り物宜敷は、斯は御疲も有まいは、阿みた如来に麦飯を、上げ奉るも勿体なや。是でも罰が当らぬは、御慈悲の上の御慈悲ぞや。身の置所も無そとて、声も惜ます泣れける。当年も秋の初雨も、無端に聖人様、「(九ウ) 涸々溜て御歸あり。聖人は是を聞き召し、明法坊が愁敷は、何が哀で歎そと、問せ給ひは明法坊、泪と共に両手を付、祖師聖人の御姿を、見上げ見下し嬉げに、弃子の母に逢ふ心地、泣た眼で爰々と、申上るも勿体なや、祖師聖人は誰有ふ、天津兒屋根の御末成、易行他力の大導師、房崎公の御孫「(十オ) なり。いかに衆生が苛とも、

板敷山の岩角に、歩や跣の行戻り、御身勞る心なし。左程に被成^レ御苦勞^ニ共、花の都に御座られても、十方衆生の御済度は、御心まゝに成べきに、勅使の花は都から、此関東へ咲続、御流罪迎も天子より、御勅免の事なれば、早く御帰^リ被遊、斯哀成御姿を休せ申物^一（十ウ）ならは、正信坊や蓮位坊、此明法坊もいか^ハ斗、安堵し奉るべしと申上れば聖人は、やれゝ愚成る、明法坊も、誰が能事を否ならめ、此親鸞も好なれと、後衆極てあいせう多しと云事有。昔、光極天皇は、此世界の衆、身に耽り給ひ、其業報のむくい^ニや、死出の旅地を只一人、泣々行せ給ひしを、本田の善助^一（十一オ）天皇の、御身替り、慈悲心、蘇生給ふ事がある。此親鸞も凡夫なれば、我古郷は忘れ難し。御勅免の幸に都に帰る筈成と、越後信濃の同行や、悪人女人の信心決定させて見ぬ内は、譬野の末山の洞、狐狼野干に咬共、都へとは帰るまし。多く衆生が暗の夜に、松明無に行ことく、別而女人は疑の、心の霧を^一（十一ウ）私はせて、信心堅固の玉の輿に、乗せぬ間は親鸞も、都へ迎は帰るまし。寝ても覺ても衆生の事、忘る、障の無事は、此親鸞が煩ひぞや。衆生往生するならば、我れが煩も快氣して、御同朋共云れたや、御同行共云れたきに、是程不便な同行

に、別れて都へ帰れとは、心強ぞ山伏殿、衆生往生するならば、諸仏踊て御悦^ビ（十二オ）夫のみならず、諸神諸菩薩迄、清淨斯念の御悦び、是を思ひは親鸞も、身は碎々に成連も、是を見棄て帰らず。南都に十方三世、越後、関東、武蔵の国、大隅、薩摩、蝦夷松前、虎伏嶽、千里の野辺に至る迄、此親鸞が念力は、南無阿弥陀仏と呼小鳥。凡夫の闇に迷ふ夜も、我念力明鳥、十方衆生と鳴な^一（十二ウ）らは、金剛堅固の目を覺、五濁せんの手を合せ、南無阿弥陀仏と唱ふ迄は、帰れ登れと云て呉るな明法坊。此親鸞が氣俣に信濃の同行を勧めさせてくれるなら、夫ほど嬉ひ事がない。人の振見て我振を、直して呉よ明法坊。都へ帰れとは、衆生地獄へ遣だいが、夫は昔の弁縁の、山伏心の残るぞや。我身を^一（十三オ）突て人の痛さを知るならば、浄土參をした^ニいなら、衆生も吾も同事。悪人女人の身替りに成て、浄土へ遣たいと、思ふて社は誠なれ、と被仰けは、明法坊五体を大地に転臥、是はゝと斗にて、誤ましとと胸迫、涙と共に申上るは、彼程に御慈悲の深きとは、兼て思ひ知れ共、聖人様の御心勞、御身勞る^一（十三ウ）心から、申上るも誤ぞや、真平御赦免被遊と、大声上て歎る。明法坊の御歌も、師弟妙成御心と、よろこばぬ者は

なかりけり。

南無阿弥陀仏く」(十四才)

弘化三丙午歳四月下旬

写之

江三押

利太郎」(十四ウ)

(本学教授)